家　庭　科

藤　本　文　乃

1　家庭科における知識創造とは

家庭科における知識創造を次のように定義する。

家庭科における知識創造の定義

日常生活にかかわる課題を解決していく活動を通して　日常生活に必要な知識や技能を自分にとって意味のあるものとして実感をもってとらえ　身につけながら　生活をよりよくするために活かしていこうとする営み

家庭科の学習が始まる５年生までに、子どもはそれぞれの生活の中で個々に家庭科のスキーマを培ってきているが、それは断片的であったり個人差が大きかったりする。子どもにとって自分の生活の仕方が当たり前であり、校区がない本校の子どもは、友達の家に遊びに行くことが少なく、違う生活の仕方に気づく機会は少ない。そして、今日の子どもは、家事労働の経験や衣食住に関する行為そのものに関心を持って見ることも少なく、その行為には意味があることにあまり気づいていない。

このような状況で生活に必要な知識や技能を伝達的に教えられても、それは実感の伴わない単なる知識であり、自分の生活と結びつけ生活の中に活かすことは難しい。家庭科の目標にある「基礎的な知識と技能」とは、子ども一人一人の自己実現に働く、意欲、思考力、判断力、表現力などの資質や能力と統合された知識と技能である。そこで、まず自分の思いや願いに基づいて自分の家庭生活を見つめ直す中から課題をもち、友達などとかかわりながら解決していくことを通して、様々な家庭生活に関する知識や技能を習得しそれを生活の中で活かすことの意味に気づいていく。そして、自分の生活をよりよく快適にすることができる知識や技能としてそれを身につけていくことを大切にしていきたい。

生活の中での試行や実践

さらに、それらを自分の生活の中にどのように活かせるかを考え試行や実践を行う。自分の生活が、知識や技能を生かし工夫をすることでよりよくなること、自分も生活主体者として、より多くの選択肢の中から生活にかかわることを選んだり行ったりできること、家族のために何かができることに気づいたり実感したりすることが、生活をよりよくしてこうとする意思と実践力を育んでいくと考える。このような実践を積み重ね自己有用感を高めていくことが、自ら生活課題を見つけ解決していける自立した生活者としての基礎を培っていくであろう。

自己有用感を高める

2　家庭科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

認知と変容の実感の積み重ねによる実践力

家庭科では、子どもが日常生活に関する知識や技能を身につけてきた過程をふり返り、それを自分にとって意味のあるものととらえ当事者意識をもってその後の学習や生活に活かそうとしているとき、プロセスを自覚している姿ととらえる。子どもが、授業での学びと自身の生活が結びついていることを認知し、自己の変容を実感していけるようにしたい。また、この認知の積み重ねが以後の学習でもそれを活かして主体的に学習を進めていく力となると考える。

(1) 家庭科における「よさ」

四つのよさ

家庭科における「よさ」を以下の四つと考える。

日常生活には、家庭生活や学校生活、広く社会生活全てを含むものととらえる

一つ目は、子どもが自分の日常生活に疑問や課題を見出し、なぜかな、よりよくしたいなどの思いを持ち学習への必要感を持って学びをスタートできることである。生活の仕方が一人一人違う基盤に立つ子どもが、その違いを共有することで共通の課題をもち、みんなでその解決に向かう。子どもは自分とは違う生活の仕方や考え方を新鮮に受け止め、自分の生活の仕方だけが全てではないことに気づき、学習へ向かうことができる。

二つ目は、課題解決の方法が共通であったり個々で違ったりすることである。そのため課題解決のためには自ずと友達とかかわる必要が生まれ、多様な見方、考え方を知ることができる。

三つ目は、課題解決において、実践的・体験的活動を取り入れ、実感を伴いながら学ぶことができることである。単なる言語的な知識でなく、おいしい、涼しい、暖かい、心地よいなど、五感を伴う学びをすることができる。

四つ目は、学んだことを生活の中で自分なりに活用・応用しやすいことでありそれによりできた喜びを感じられることである。

このように、知識創造のプロセスでそれぞれのよさが共有されていくことを重ね

ていくことで、自分の力で実践していこうとする意欲、実践できる力が育まれていくのである。

(2) 「よさ」の共有のための手だて

① 可視化

生活を見つめる時間

子どもが自分の日常生活に疑問や課題を見出すために、自己や家族の生活の中の営みを見つめる時間をとる。その時に、具体的な課題設定につながるように調査や観察の観点を明確にしておく。見たり聞いたりして調べたことを文だけでなく絵や写真などを使い表現させ、それに対する自分、時には家族の思いを文章化させることで今の自分の現状を認識できるようにする。そうすることで調べたことや思いを友達と交流しやすくなり、共通点や差異・疑問などが明確化され、自己の認識や習得レベルを客観的にとらえ、課題をもつことができると考える。

課題解決においては、多様な資料や実験方法を目的に応じて提示し学び方を選び取っていけるようにする。その際、ワークシートや板書などを工夫しその目的、結果、生活に生かせることの観点を示し、自分の課題解決の道筋が自覚できるようにする。そして、課題解決の途中で機を逃さず、友達の生活の工夫や生活をよりよくするための考え方の変化や学び方の「よさ」を価値づけ、ふりかえりを残していく。

② 「かかわり」

グループ構成や人数の変化

題材や扱う教材によって、グループ構成・人数を変化させることで、多様な生活実態だからこそ生まれる考え方が表出されるようにする。また、全体に共通する大きな課題をおさえた上で、個々の生活実態や課題に対応できる課題選択型の構成も取り入れる。例えば、「快適な住まい方を考えよう」という共通の課題から、個々に「暖かさ」「明るさ」「風通し」などの課題を持つことである。自分とはちがう課題の取り組み方や成果を交流するときには、自分の生活への関連や応用を考えることを促していく。

何によって、課題解決に結びついたり知識や技能が自分にとって有意味化されたりしたかが明確になるように、グループでの活動や全体での活動のかかわりを評価する観点を明らかにし、学級全体で共有することで、子どもが多様な価値観や生活実態をもつ仲間と共に意義を意識して以後の学習へも活かしていくことができると考える。

家庭実践を促す

題材ごとに学習の最後には生活に活かす場を設定し、題材に応じて全員に「家庭科実践カード」を配布し家庭実践を行うように働きかける。学級通信で学習のめあてや内容を伝え家庭との連携を図りながら主体的な実践を支援する。実践後は実践の様子とその結果の交流を行い、仲間に認められる喜びを味わうとともに、友達の実践から新たな生活の工夫や知識、価値観を取り入れる機会を持つことができ、さらなる実践への意欲を高めていくことになる。

③ 実践的自覚へのデザイン

二段階の実践

学びによって得た知識や技能を、日常生活の中で実践していくことが家庭科のねらいである。その実践の仕方にも段階があると考える。個人差はあろうが、授業を通して学んだ基礎的・基本的な知識や技能を、そのままやってみることが始めである。さらに、実践してみたことから新たな気づきが生まれ、自分や家庭にあったやり方を工夫してやってみることが、発展応用であるといえよう。そのためには、成功経験だけでなく失敗経験も意味のあることとして価値づけていく。また、自己の変容や頑張りを家族や友達から認めてもらうことが、自分が学んだことへの有用感の認識になる。前述したように取り組みの様子をお互いに見たり聞いたりできるような工夫をすると共に、家族の協力も仰いでいく。「生活に活かそう」という呼びかけだけでは子どもは実践に向かわないと考える。そこで、家庭実践をやるべき課題と位置づけ長期休暇での取り組みも働きかけていく。

家庭との連携と長期休暇の利用

知識創造のプロセスのくり返し

「生活を見つめる→課題をもつ→実践的・体験的活動を取り入れて解決する→生活に活かす」という知識創造のプロセスをくり返し行い、子どもに意識づけていく。そのプロセスの中で自分の変容をふり返り、自分の成長や家庭生活における価値や存在の自覚を高めていくことが、よりよくしようという視点で日々の生活を見つめ自分から実践しようとする力となっていくと考える。